

**【研究ノート】**

**環境のSF小説  
熱い視線**

**増 田 辰 良**

## 研究ノート

## 環境のSF小説

## 熱い視線

増田辰良

## 目次

1. 原始の森  
参考文献
2. 母子熊  
付記
3. 帰郷
4. 木霊
5. 樹木  
付記  
参考文献

## 1. 原始の森

太古より、はるか遠くから、じーっとこちらを眺める目があった。こちらにいる者たちは誰一人として、その視線に気づいていない。

その目には広大な青と緑の色が写っていた。青は大海、緑は原始の森(天然林)だった。大海は種々の生命の増殖場であり、森は清涼な空気に満ち溢れ、多くの獣たちが闊歩し、うじゃうじゃと湧き出る微生物たちの棲みかであった。森と海は共生しあっている。森が枯れば、海は滅びる。

ある日、どこから自然界に現れた人間という新種の動物が原始の

森に入り、力任せに樹木を伐り倒し、草を焼き払い、地面を陽の下に曝させた。増え続ける自分たちの口を糊するのために牛馬を使い、その地面を耕し、命を維持する栄養素を体内へ取り込むための食物を育てはじめた。それに歩調を合わせ、海も汚れはじめた。

蒸気で機械を動かす技術(動力)を得た人間はその尽きない物的欲望を満たすために樹木を伐っては化石燃料(石炭・石油・天然ガス)を燃やし、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を出し続けていた。そのかいあって、物的には過剰なまでの豊かさを手に入れた。他方で地球の温暖化という面倒な問題も生じていた。いずれ直面せざるをえないこの問題を知っているながら、そ知らぬふりを通してきた。しかし、時すでに遅し。世界の平均気温の上昇を動力を得る前に比べて1.5度に抑えようとすると、CO<sub>2</sub>の排出量を十数年後にはゼロにしなければならぬ事態になっていった。東シナ海南部の海水温は過去100年で1.2度上昇した。これは地球の全海洋平均の2倍のペースであった。そのしわ寄せは貧しい人間たちに襲いかかった。インド洋ではサイクロンが頻発し、過剰に降る雨は草を繁茂させ、それを好むバッタを大量に発生させた。バッタは穀物を喰い尽くし、食料危機を引き起こした。

キーワード：エイリアン、環境、生物、樹木

ただし、人間は何もしてこなかったわけじゃない。CO<sub>2</sub>を吸収し、温暖化を抑制し、汚染された空気を洗浄してくれる樹木を増やすこともしてきた。が、その絶対的な面積が足りない。違法伐採も後を絶たない。原始の森は減るばかり。CO<sub>2</sub>を排出する基準を取り決める話し合いが頻繁に開催された。CO<sub>2</sub>を売買する制度もできた。しかし、これらは羊頭狗肉の感があった。物的欲望という本性は隠されたままである。

この国として同じこと。原始の森を伐り開き、食物の増産とともに同胞の数は増え続けた。さらなる地面を求めて海に向こうにいる無垢な人間たちを攻めた時代もあった。ある個人を現人神あらじがみと崇め、その取り巻きたちの理不尽な愚考が全体を理不尽な愚戦へと押しやった。理不尽な愚戦に動員する予備の同胞たちの数も、「産めよ、増やせよ」と増やし続けられた。やがて愚戦も、この上なく理不尽極まる凶器の使用によって終焉させられ、海に向こうから同胞たちが津波のごとくこの国へ戻ってきた。その口々を糊する食物が足りない。

同胞たちは、また樹木を伐り倒し、草を焼き払い、広大な地面を陽の下に曝させた。地面は容易に掘り起こし、広げることができた。愚戦のために改良された文明の利器を使ったから。それとともに、多くの獣たち、植物たち、微生物たちがあつげなく姿を消した。

同胞たちは物欲のままに化石燃料を使いCO<sub>2</sub>を排出しつつ新たな機械を稼動させた。その熱効率の悪さから、電源は原子力に頼る時代となっていた。経済規模は拡大し、しばらくは世界第2位の地位を維持できた。その一方で、自然環境を破壊し続けるという暴挙から目を逸らしてきた。が、もはや直視せざるを得ない状況下に置かれていた。

はるか遠くから、じーっとこちらを眺める目はこの国の北の端にある原始の森に吸い付いていた。海峡を越えて広がるこの北の大地は近

(11)

代になつてから開発がはじめられ、多くの入植者たちが広大な原始の森を伐り開き、同胞たちの胃袋を満たす食料増産地として期待された。森が伐り開かれたとはいえ、今も総面積の71%にあたる554 haは森であった。この面積はこの国の総森林面積の22%を占めている。554 haのおよそ68%は依然として原始の森が残っていた。

この北の大地と海峡を挟んで位置する南西に長く延びる列島の開発は凄まじかった。その報いであろうか、そこに暮らす同胞たちは自然から数多くの理不尽な仕打ちを受けてきた。夏の猛暑時における豪雨、それに付随した山の崩落、河川の氾濫による無数の被災者たちの死と涙。

豪雨の元凶は温暖化であった。気温が1度高くなると、空気を含むことができる水蒸気の量は約7%増えることも検証されていた。

この理不尽は自分たちの行いに起因することを理解し、反省する同胞たちは少ない。人間は自分からは遠い理不尽に対して美しい正義感を抱くようだ。そうしたときの怒りや、被災者の痛み、苦しみへの同情を感傷や情緒で終わらせやすい。理不尽は自分のせいではないし、自分ではどうしようもない、と。同情することには、どこか甘美な諦念ねんが含まれているようにさえ思われる。人間は度重なる理不尽を一時いつときのものとして理解し、うまく忘れて次の希望へとつなぐことに長けてきたようだ。

それが証拠にこの理不尽にも怯むことなく、有り余るほど食物を生産していた。過食による疾病の蔓延、罪悪感のない食品ロスと大量廃棄。これじゃあ、罰を受けないわけがない。

他方、もはや食物は口を糊するだけの物ではなくなっていた。文明の利器と違わず、交換価値を生む物となっていた。その交換の仲立ちをする「金」を求めて同胞たちは身を粉にして動いた。動けば動くほ

ど、金を入手できた。ある時代を生きた同胞世代にとって、その息も切らない動きは理不尽な愚戦への悔恨を忘れる術だったのかもしれない。文明の利器は質が向上し、その数も増え、それに頼れば額に汗することもなくなつた。口を糊すること以外の享楽に金を支弁できる余裕もできた。そう時代は変わった。

今や同胞を評価する基準は職業と居所、稼金の規模だけになつてしまつていた。成功者とそうでない者との線引きがはっきりとされた。前者は勝ち組と呼ばれ、自身の余生を考え、持つべき子孫の数も自発的に制限した。負け組と呼ばれた後者には、もとよりその余裕すらなかつた。自ずと同胞の数はしだいに減り続けた。減る度合いは、北の大地において顕著であつた。為政者たちがこの人口減少の危機をどう叫ぼうが、対策を打ち出そうが、絶滅の途を突き進むばかりであつた。かつて住んでいた家屋と高層ビルディングはみるみる廃屋となつた。それらは、しばらくは捨て置かれたが、その後、解体され更地にされた。解体されないものは、雨風に耐え切れず崩れ瓦礫がれきの山となり、ついには土に還つた。誰にも見向きされない広大な地面がコンクリートの欠片とともに再び陽の下に曝された。その面積は列島中に広がつていった。やがてその地面に鳥たちが一粒の種を落とし、草が茂り、小樹が芽を出し、大樹へと育つていった。

数世代が過ぎた。時代は人間たちが自然を冒瀆ぼうとくしてきたことに猛省を促した。人間たちは自然環境を破壊する元凶を断つ努力を迫られていた。脱炭素(CO<sub>2</sub>)が叫ばれ、ガソリンだけで走る新車の販売も禁止された。

もちろん、この国として例外ではなかつた。後世のために記しておく。近未来のある年までに、この国ではCO<sub>2</sub>などの温室効果ガスの総排出量を、森林の植物が光合成で吸収する量などと釣り合うまで減

らすカーボンニュートラル(＝実質ゼロ)が叫ばれた。2018年度の時点において、総排出量は12億4千万トンだった。一方、森林、農地、牧草地などによる吸収量は5590トンに過ぎなかつた。政府はそのために戦略案も公表した。

が、これも多くの内容が見かけ倒しに終わった。依然として、国民一人あたり年間7.6トンのCO<sub>2</sub>を排出していた。その約7割は移食いしょく住じゅうに起因したままであつた。緊急時の電力を確保しようとしてCO<sub>2</sub>を排出する石炭火力発電所を稼動したり、新たに建設していた。これじゃあ、とてもゼロにはできない。

CO<sub>2</sub>の排出量を実質ゼロにすることは経済成長を諦めるといふことでもあつた。電力は産業の米。物作りには電力が欠かせない。その電力の供給は原子力発電所での悲惨な事故をきっかけに稼動が中断された。それに代わるものとして太陽光発電、風力発電、地熱発電の技術開発が進められた。

他方ではCO<sub>2</sub>を出さない、むしろCO<sub>2</sub>を利用する技術の開発にも着手していた。その一つがゴミ処理施設や火力発電所から出るCO<sub>2</sub>を資源として回収し再利用する「メタネーション」。これは触媒を使って、CO<sub>2</sub>とH<sub>2</sub>(水素)からメタンを合成する。メタンは天然ガスや都市ガスの主成分であり、火力発電所から排出されたCO<sub>2</sub>をメタンに変え再び発電所で燃料として利用する。また天然ガスや石炭の代わりにアンモニアを燃やして、CO<sub>2</sub>の排出量を減らす試みもあつた。そのアンモニアを灯油に混ぜたガスタービン発電も実用化した。さらに火力発電所で石炭の微粒子に気体のアンモニアを混ぜて燃やし、CO<sub>2</sub>の排出量を減らす技術も実用化された。

こうした努力は1国だけでは報われない。世界中の国々が協力して初めて効果をともなう。がしかし先に経済成長を遂げた国、後から追

いかけける国、思惑は国ごとに違う。結局、世界のCO<sub>2</sub>排出量は増えこそすれ減らない。

とつくに経済成長を諦めたこの国も、数世代にわたる我慢と努力の成果として、CO<sub>2</sub>の排出量は微量にすぎなくなった。北の大地には草も樹木も繁茂し、すっかり原始の森に戻った。森は清涼な空気で満ち溢れていた。獣たちは闊歩し、微生物たちはうじゃうじゃと湧き出していた。しかし、この大地にかつていた多くの同胞たちの姿はもはやどこにも見えない。目に写るのは樹間のいたる所に架かり微風に揺れる色とりどりのハンモックのみであった。心地良さそうに寝そべっていた「物」が不意に大きく動いた。目を凝らすと、それは太古よりこちらをじーっと眺めていた物たちであった。

最後に気づくことではあるが、この話は奇怪そのものであること以外に樹木たちが必ずと言っていいほど更地で生長してくることもまた事実であった。それもかつて樹木たちがいた庭では極端に早く生長し、また生命力も旺盛だということである。異常な活力と忌まわしい力を持ち、致命的で執念深く、疾病じみた、この樹木たち。樹木たちはすべてを飲み込む。

今や北の大地を覆う原始の森に棲む物たちの関心は海峽のはるか向こうに残る森と都市にあった。じーっと眺める視線の先には生き物と樹木たちがいる。

#### 参考文献

- 『朝日新聞』「大気の川」記録的豪雨をもたらす」2020年7月16日。  
 『朝日新聞』「日曜に想う 抗議のマスクと一編の詩」2020年9月27日。  
 『朝日新聞』「CO<sub>2</sub>を出さない未来へ」2020年10月5日。  
 『朝日新聞』「のちゃんのDO科学 温暖化で大雨が多くなった？」  
 2020年11月14日。

(四)

- 『朝日新聞』「脱炭素の戦略 めざす理想もっと高く」2020年12月28日。  
 『朝日新聞』「欧州も小雪 五輪開催危機感」2021年1月4日。  
 『朝日新聞』「のちゃんのDO科学 温室効果ガス、どう減らす？」  
 2021年1月23日。

- 『朝日新聞』「脱炭素 アンモニア急浮上」2021年2月11日。  
 『朝日新聞』「CO<sub>2</sub>ゼロ どんな生活？」2021年2月22日。

## 2. 母子熊

はるか遠くから、こちらをじーっと眺める目には熊の母子が写っていた。

「かあちゃん、腹減ったー」

「だまって、寝なさい。夜が明ければ、食べ物を探しに出るから」

「でも、腹減って、寝付けないよー」

「しよがないねえ。口を開ければ腹減ったー、腹減ったー」

「……かあちゃん。俺、1度でいいから人間になってみたい」

「あら？ なんてことを言い出すの？ 人間になりたいなんて。人間はわたしたちの敵だよ。樹木を伐って、山を切り開いて自分たちの縄張りを広げるばかりでえ。なにも悪さをしていないのに遭うと鉄砲で撃ってくるし、罠は仕掛けるし。この前も隣の森に棲む小父さんが罠にかかって、殺されたんだよ。皮を剥がれて、食べられちゃうんだ。ああ、怖ろしい」

「でも、人間になってみたい」

「しよがないねえ。なりたいたい、なりたいて。あんな傲慢な生き物のどこがいいのさ。まだ、カラスやヘビのほうがましだよ」

「だってさあ、食べ物を探さなくてもたくさん持っているじゃん。今

日なんて1日中、歩き回ってもドングリを50個しか食べられなかったよ。あとは草を食べてばかりでえ」

「それもこれもみんな人間が悪いのさ。ドングリの実る樹木を伐ってしまうし、CO<sub>2</sub>を出しちや、温暖化を加速して森の生態系を壊してきたから。この山のすぐ下を汚い煙をゴーゴーとはき出して化け物みたいな車が走ってるだろ。そいつに追突されて死んだ鹿を見ただろ？」

「うん。見た。でもお、人間が食べている物はみんな美味しいよ」

「美味いって、まさかあ、お前？」

「うん。この前、人間が出すゴミを漁ってみたのさ。珍しい味の物もあつた」

「そんな人間の食べ残しを口にしてたら、毒を盛られるかもしれない。見つかったら、撃ち殺されてしまう。もう、絶対にゴミを漁っちゃあだめだ。人間の家に近づいちゃ、だめだよ。かあちゃんを悲しませるようなことだけはしないでくれ」

・・・

「さあ、ご飯ですよー」

「はーい。今夜はハンバーグと唐揚げ、やった！」

「お魚もあるでしょ。ちゃんとお野菜も食べるのよ」

「……うん」

「あら、ピーマンを床に落としてえ。この子は、ちゃんとお箸で挟んでから口に入れなさい」

「……うん」

「あらまた、落としてえ。今度はミニトマトじゃないの。床に落としたり物は口に入れちゃいけませんよ。バイ菌が付いていて、お腹を壊します」

「はーい」

「返事だけは、しっかりとできるのね」

「あーあ、お腹いっぱいになっちゃったあ」

「こんなに残しているじゃないの。しょうがないわね。台所の残飯入れに入れておいてね。明日、ゴミと一緒に出すから」

「はーい」

「あら、お父さんもたくさん付けたお野菜も食べてくださいよ。納豆、それにお魚も……。唐揚げも2個までですよ。脂っこいものばかり食べるから高血圧、糖尿病、高コレステロールになってしまつてえ。そんな病人が増えていそうだから、自覚してくださいね」

・・・

「かあちゃん、俺、やっぱり人間になるの止めるよ」

「あら、良かった。でも、昨日まではあんなになりたいて言つたのに、どうかしたのかい？」

「うん。人間ってねえ、1日に3回も食べるんだよ。それにねえ、食べ物残して、捨てるんだ」

「そんなもつたないことをしてるのかい。ああ、熊笹から外に出るんじゃないよ。近くに人間の住んでいる古家があるから。見つかるよと殺されちゃうよ」

「うん。分かつてる」

「さあ、たくさんドングリをお食べ。よく実つて美味しいだろ」

「うん。美味いよ。それでねえ、捨てる量がすごくて、1年間の食品廃棄量は2842万トンもあるんだ。そのうち、まだ食べられるのに捨てている量(食品ロス)は646万トンもあるんだつてさ。食べられる物を捨てているんだぜ」

「えーっ！ 食べ物を捨てる？ そんな粗末な扱いをしていると、きっとそのうち罰が当たるさ」

「でねえ、この646万トン是世界全体の食料援助量の約2倍にあたるんだ」

「これは驚きだね。食べられなくて困っている人間たちに援助する量の倍も捨てているのかい。ああ、話に夢中になって、熊笹を大きく揺らしちゃいけないよ。いることが知れると撃たれかねないからね。用心しなさいよ」

「うん。それでえ」

「まだ、あるのかい」

「ある。646万トンのうち、各家庭からは289万トン、ホテル、レストランや外食産業からは357万トンが捨てられているんだ」

「捨てるくらいなら、作らなきゃいいのにねえ。呆れてものが言えないよ」

「そうだよねえ」

「おや、あんなところにアケビがある。まあ美味しそうだこと。人間に伐り倒されずに残って、よく実ったねえ。かあちゃんが樹木に登ってとってくるから。ここにいるんだよ。じっとして動くんじやないよ」

「うん。気をつけてね」

母熊は口に銜くわえたアケビを小熊の前に置きます。

「はい。うんとお食べ」

「かあちゃんも食べれば、美味しいよ」

「かあちゃんはいいいから、お前がお食べ」

「……それにねえ、驚いたことには、食べすぎて病気になる人間が増えているんだってさ」

「食べ物を捨てたり、病気になったり……」母熊は言葉を切り、「ああ!？」と声を洩らすと、さっと小熊を腹に抱きかかえた。

「ズドーン!ズドーン!」

(六)

「かつ、かあちゃん!かあちゃん!」  
「はっ、はやく、逃げるんだよ!」

小熊は振り返ることなく、森の奥へ奥へと一心に走った。そのつづらな両目からはとめどなく涙が流れていた。

それをはるか遠くから、じーつと眺めている目にも涙が溢れていた。その目は水底のガラス片が陽に反射するようキラッと光った。

(付記。統計数値は2018年のもの。『朝日新聞』2019年1月1日参照。)

### 3. 帰郷

はるか遠くから、こちらをじーつと眺める目には古家の庭が写っていた。

「みんな。郷里へ帰ろう」

年嵩としかまのカラ松は幹を左右に振って周りの樹々たちへ沈痛な声をかけた。

「そうですね。早く、決行しましょう」

左隣にいるオンコは強い口調で答えた。

「モミジさん。どうですか」カラ松が促すと、「私も帰りたいです。

3日後には、みんな根こそぎ抜かれて、伐り刻まれて焼却場へ運ばれて、燃やされるそうですから」と、モミジも声を小刻みに震わせて賛成した。

ここは古家のある庭。数日前のこと。老夫婦が死去後、古家と土地を相続した息子が家屋を壊し、更地にして売却するという話を不動産屋としていた。必ずしも、見栄えの良くない庭木たちには商品価値は

ないとのこと。他所へ移植されることもなく、抜いて裁断してゴミ焼却場で燃やすことに決めたようだ。

「いつ、動きますか」

オンコはカラ松に問いかけた。

「2日後の真夜中にしよう。昼間は目立ちすぎる。人間は昼と夜とは、われわれを見ても受ける印象が違うらしい」カラ松は一息おいて自信たっぷりな声で「夜には畏怖を感じるそうだ」と答えた。

「なるほどお、われわれが出す葉音、葉陰が作る暗闇、確かに怖いかもしれませんね」モミジも同意を口にしてから、「カラ松さんはここに何年いましたか」と訊いてきた。

「この幹を見てくれ。およそ50年だよ。大枝は虫に喰われて、枯れかかっているけどな」

と言つて、小枝で大枝をさすつた。

「50年ですかあ。私は35年くらいですね」と、オンコが返すと、「あなたがここに来たときはしつかり覚えてるよ。あまりにも小さかったので、成長できるのかと心配していたんだぞ」

とカラ松は声を弾ませて、懐かしそうに話した。

「じゃ、私が一番若いのですね。今年で20年くらいですから」と、モミジも話しに入ってきた。

「そうそう。モミジちゃん」とカラ松がちやかすと、「もう、大人ですから」

モミジは笑みを含んだ不満な声を洩らした。

「ところで、カラ松さんの郷里はどこですか」

モミジが訊いた。

「ここから1000キロほど北の大地にある森だよ。まだ祖父母、父母、兄弟たちも健在だと思います。なにせ、手付かずの原始の森です

から」

「1000キロですかあ。大変な旅になりますね」

「そういうモミジさんの郷里は？」

「私は、近いです。3つ東隣の山裾ですから。昔、炭鉱のあった町ですよ」

「ああ、そりゃ近くていい。で、オンコさんは？」

「私の郷里は、200キロほど南の温泉のある町です。農家の裏山です。春にはゼンマイとワラビが採れて、いいところですよ」

3本は郷里を目蓋の裏に思い浮かべます。

「人間は身勝手だよな。われわれを必要として植えておいて、不要になれば抜いて伐つて燃やすなんて」

と、モミジが愚痴ります。

「そうだよ。金を出して植木屋からわれわれを買って置いて」

オンコも続けます。

「分かっちゃいないのさ。自然との共生なんて言葉を使いたがるが、人間は自然から利益を受け取るばかりで、自然にはなにもお返しをしない」

カラ松も加勢します。

「なにもいらないから、われわれ自然に手を加えない、足を踏み入れないで、そつと放つておいて欲しいですよ」

モミジも本心を吐露します。

「そのとおり。不要ならば、燃やさないで、どこか別の場所へ移植して欲しいですよ。それも叶わないなら、せめて郷里へ戻して欲しい」

オンコの声は大きくなります。

「自然に見放されちゃ、人間の未来も生命も危なっかしいだろうにねえ。われわれの葉っぱは空気清浄機ですからね」

モミジは最後の言葉を強調した。

黙って聞いていたカラ松は「人間の未来よりも自分たちの未来を優先しよう。みんな生命権を持っているのだから」と話をまとめた。

2日後の真夜中。

「じゃ、オンコさん、モミジさん。行くでしょう。君たちも道中、気を付けて。昼間は動かないこと。真夜中のみ、次の林を目指して動くこと。危険を察知したら、周りの樹々たちに同化すること。いいね。これが今生の別れです。最後に、長年のご交情に深く感謝するよ。わが良き友たちよ。ありがとう。お達者で」

カラ松の挨拶が終わると、3本は互いに枝と枝とを絡ませがっちり握手した。それから、振り返ることなく、それぞれ北、東、南へとゆつくり歩を進めた。

歩き始めて1時間後、カラ松は樹々のいる公園を通り抜けようとした。すると、前からフラフラと酔っ払いが歩いてきた。カラ松はすつと立ち止まり。周りの樹々たちに同化した。酔っ払いは「土地を売って大金が手に入る〜。へっへっへっ」とブツブツと呟きながら、カラ松の根元に近づき、放尿をしようとした。街灯の灯りにぼんやりと浮かぶその顔を凝らして見ると、それは息子であった。カラ松は、思わず風に小枝が軋むときのようにギーギーという音を出した。その瞬間、腐りかけていた大枝がポキリと折れ、真下にいる息子の頭を直撃した。息子は「ウーッ!」と唸ると、その場に倒れ、2度と起き上がることはなかった。カラ松はその横を、そ〜と過ぎていった。はるか遠くから、こちらをじーっと眺める目は微かに力をこめた。

#### 4. 木霊

はるか遠くから、こちらをじーっと眺める目には樹々で覆われた公園が写っていた。

どこからか「ひえーん、ひえーん」と尾を引いて、泣き叫ぶ音が聞こえてきた。音は樹々たちの悲鳴であった。重機を使って庭木たちが抜かれているのである。

その音を聞きつけて、近くにある樹々の生い茂る公園から緑色の服を着た男が出てきた。ゆつくりと重機に近づき、作業員へ大声をかけた。

「なぜ、庭木たちを抜くのですか!？」

作業員はびつくりしてすぐにエンジンを止めて、めんど臭そうに説明した。

「新たにこの土地を買って住む方が家を新築するのに、庭木はじゃまなので、すべて根こそぎ抜くよう頼まれましたね」

緑色の服を着た男は問い詰めるよう、また訊いた。

「耳を澄ませば、抜かれる庭木たちの泣き叫ぶ声が聞こえませんか」

「……いいえ」

作業員は素っ頓狂な声を返した。

「私には、はつきりと聞こえます。聞こうとしないから聞こえないのです」

緑色の服を着た男は口を尖らせて力強く言った。

作業員は笑みを浮かべ左耳に手を当て、声を聞く仕草を試みさせた。

緑色の服を着た男は、それをちゃかされたと思い、怪訝な目をして、さらに訊いた。

「抜かれた後、庭木たちはどうされますか」

「細かく伐って、ゴミ収集日に出されて、きつと燃やされるんでしょう」

作業員は親切心に加えて、差し出した右手のグーを「ボワッボワッ」と2回パーに開いて口元を歪めたまま答えた。

「別の庭に移植してもらえませんか」

緑色の服を着た男は語気を強めた。

「見てのとおり枝ぶりも見栄えも良くない。商品価値はないです。売れませんか」

作業員はサラッと言った。

「燃やすなんて、なんてことをするんですか」緑色の服を着た男は、一呼吸おいて「それじゃ、森へ、生まれ故郷の森へ戻してやってください」と静かな口調で続けた。

作業員は一瞬、ポカンとした表情をしたが、すぐになにかを察したふう目元に笑みを浮かべた(ややこしいヤツが来やがった)。

その目に向かつて、緑色の服を着た男は意を決した声で言った。

「あなたたちは自然を勝手に使い利益を受けるばかりで、自然にはなにもお返しをしない」

この言葉の意味することが理解の域を超えていたのか、作業員は「はあ」と嘆息を洩らした。

「ここにいる庭木たちは好き好んでここに来たわけじゃない。あなたたちの都合で連れてこられたのですよ」

と、緑色の服を着た男は言葉をつないだ。

がしかし、埒が明かないと察した作業員が「じゃ、どうすれば……」と問う言葉を制し、緑色の服を着た男は「ですから、燃やさないで、移植するか祖先のいる森へ戻して欲しいのです」と繰り返した。

この哀願する口調に、作業員はようやく緑色の服を着た男の素性を知らうと訊いた。

「あなた? いったいどの誰なの?」

それには答えず、緑色の服を着た男は続けた。

「あなたたちはあるがままを楽しまない。ただ、意味もなくすべてを変えようとしている」

「そう言われても、根こそぎ抜くよう頼まれましたから」

答える作業員の声は憫笑を帯びていた。

緑色の服を着た男はそれでもなお目に力を込めて言い返した。

「あなたたちは根をもたない。葉を茂らせることもできない。それでいて、すべてを手に入れようとしている」

「木の気持ちに分かる人間なんていませんよ」

作業員は明らかに目尻に笑みを浮かべていた。

この言い草にカチンときた緑色の服を着た男は、

「いいですか。緑の葉っぱは、あなたたちが出すCO<sub>2</sub>を吸って、きれいな空気に変える清浄機の役割をしています。あなたたちが楽しんでいる秋の紅葉、その落葉は亡骸たちです」

と、語気を強めて論じた。

「ああ、そんなことはどこかで聞いたことがあるような、ないような」作業員は顔を宙に向けてサラッと返した。早く作業を再開したいという素振りもみせた。

その素振りに緑色の服を着た男は苛ついた声で続けた。

「あなたたちは自分の言葉でしか考えようとしません。そして、すべてを知っていると思っている」

緑色の服を着た男は作業員を——爬虫類のような冷たい目で——キツと睨みつけた。

作業員はその目力に怯え、思わず身体を反らしたが、すぐにニタツと笑った。これ以上、説明しても時間の無駄だと判断し、視線を逸らし黙りをきめこんだ。

「大昔には、あなたたち人間も森の中に住んでいたのですよ」  
冷やかに言い終ると、緑色の服を着た男は作業員をもう一度、睨みつけてから、踵を返し、公園へと歩き始めた。作業員はその後ろ姿をしつかり目で追っていた（麥な野郎だ）。

緑色の服を着た男が公園に近づくにつれて、樹々たちは波打つようにその幹と枝を大きく揺らした。まるで主人の帰りを迎え入れる儀式のように。男は櫻の大樹の前で立ち止まり、その幹に両手をかざした。すると、たちまち消えた。その瞬間、また樹々たちはざわざわと大きく波打った。

それをしつかりと見とどけた作業員は「ギャー！ ワアオー！」と奇声を上げると、重機から飛び降り、なにごとか泣き喚き意味不明な声を撒き散らしながらどこかへ走り去った。

その光景をはるか遠くから、じーっと眺める目は晒っていた。

## 5. 樹木

はるか遠くから、こちらをじーっと眺める目には、ある男が写っていた。

どうやら私は樹木たちの声から逃れられないようになっていらい。これは精神分析の言葉でいう有情体験の一種であり、人間以外のもの、犬や猫、鳥、虫、石、樹木、空、風、水などが自分に向って語りかけてくる感覚のことである。

私の前には鬱蒼とした森がある。そこは更地だった。更地になる前は民家があった。その庭にはたたくさんの樹木が整然と植えられていた。住人の死後、家屋は壊され、樹木たちも伐られ、根こそぎ抜かれて更

(10)

地にされたはず。間違いない。3日前にもこの道路をウォーキングしたのだから。私は幻を見ているのだろうか。見ているのならば、なぜ見るのか。

人気がない道路に一人立ち、樹木たちを見上げている私は不安を鎮めることができずにいた。なぜなら、樹木たちが侵入してこようとすめるものに苛立ち、立ち向かうために神経を集中していることをピンピンと感じたからである。扇情的で不穏当ともいっていいほどその葉っぱの輝きは自分たちが植物以上の存在であることを主張し、傲慢で攻撃的で力に満ち溢れた存在であることを誇示しているようにさえ思えた。樹木たちに狂気めいた生命力、増殖力などあるのだろうか。それもかつて樹木たちがいた庭で、更地にされた地面では極端に早く生長し、また生命力も旺盛だということである。異常な活力と忌まわしい力を持ち、致命的で執念深く、疾病じみた、この樹木たち。樹木たちはすべてを飲み込む。

「ギーン、ギーン、ヴィーヴィー、ギーン、ヴィーヴィー」

隣人宅で樹木たちを伐り倒すチェーンソーの音がうるさい。

「また、伐ってますよ。その後、抜くんでしょうね」

ベランダで洗濯物を干す女房は部屋にいる私に（もう、いい加減にしてよー、と毒づきたそうな）声をかけてきた。

「考え方を変えなきゃあ、伐つても、抜いても生長してくるさ」

私もベランダへ出て、しばらくその作業を見守った。

チェーンソーの音を聞くようになってから1カ月になる。もともと、隣人宅は樹齢が50年になるかというカラマツ、蝦夷松、榎松、栗、オシロイ、コブシ、モミジなどの樹木たちがたくさん植わっていた。高齢のご夫婦が亡くなった後、近所に住む息子が隣市の不動産屋へ土地を

売ったようだ。「ようだ」と言うのは、更地にした後も何ら挨拶がなく、拙宅前の住人から噂として知らされたからである。

樹木たちはすべて伐り倒され、根こそぎ抜かれどこかへ運ばれた。家屋は重機によってあっさり壊され、その瓦礫もダンプカーに乗せられてどこかへ運び去られた。4カ月後、新しい家屋が建った。その屋敷内には、樹木は一本もない。庭は黒いコルタールが塗られていた。その住人は隣市から転入してきた老夫婦で、私たちよりも高齢者であった。新居に入居して数日後、事件は発生した。

その日の朝、インターホンが忙しなく鳴った。ドアを開け玄関先に出ると、この世の者とも思えない形相をした隣人が立っていた。隣人はすがるような声で話を聞いてくれと言った。私は最後まで興味深く聞いた。

いつもの時刻に目を覚ましカーテンを開けると外はまだ真つ暗闇だった。室内灯を点け、壁掛けの時計を見ると、6時30分。とつくに太陽が顔を出している時刻である。昨夜の天気予報でもその日は朝から快晴になると報じていた。1時間が過ぎてても家の前の道路を小学校へ通う子供たちのかん高い嬌声は聞こえてこなかった。戸外へ出てみると、ドアを開けた。その瞬間、腰を抜かしそうになった。そこには森の奥にでもいるかのような光景が広がっていた。家屋は樹齢100年以上もあるかという太い樹木たちに囲まれ、その大きく伸びた枝々の下にあった。真つ暗な樹間を抜けて道路を目指し手探りで歩を進めた。どれくらい時間がかかったのだろう。やっとの思いで道路に出ると、そこには初夏の太陽がサンサンと輝いていた。家屋はまるで樹木たちに飲み込まれているようだった、と隣人は声を震わせながら話した。

聞きながら私も隣の敷地へ目をやると、確かに鬱蒼とした森が見え

た。

午後になると、大型のダンプカーと重機がやってきた。手にチェーンソーを持つ屈強な作業員たちが夜までかかってこれらの樹木たちを伐り倒し、重機でもって根を掘り起こし、どこかへ運び去った。

翌朝。ベランダから見下ろすと、樹木たちはきれいさっぱりと無くなっていった。新築の家屋は太陽の光を余すところなくランランと受けていた。

ところが5日もすると、隣人はまた森の住人となった。家屋は太い樹木たちに囲まれ、その大きく伸びた枝葉の下にあった。樹木たちを伐り倒す作業もおこなわれた。この間、隣人は土地の売買を仲介した不動産屋にも不満を聞かせていたようだ。

今朝もチェーンソーの音に混じって誰かを罵倒する隣人の怒声が二重窓越しに響いてきた。

「もめてるみたい。怒鳴ってるわよ」

ベランダにしゃがんで、盗み見するようその情景を眺めている女房は不安そうな声をかけてきた。

「だらうな。もめるさ」

私はさらりと言っただけ。

「お父さん。ちょっと行って、仲裁してあげれば」

聞くに堪えられなくなったのか、女房は私をそう促した。隣人の喧嘩だぞ」と返したものの、隣人も若くはない。人生の先輩でもある。

「分かった。ちょっと聞いてくるわ」

そう言うと、私は立ち上がった。

「どうかされました？」

隣人と見知らぬでっぷりと太った中年男の間に入り、声をかけた。

すぐに、中年男は名刺を差し出した。隣市にある不動産屋の営業マンで名前は鈴木晃<sup>まろろ</sup>。鈴木はいかにも営業マンという愛想笑いを浮かべ、「この町内の土地・家屋の売買を担当しております」と、ちょこんと頭を下げた。

「この町内に売買物件なんてあるの？」

私はちやかすように訊いてみた。

「はい。この町内は札幌市に隣接しておりまして、静かで治安もよく、また割りと敷地も広いものですから、すぐに買い手がつきます。人気のある地域です。この向こうの更地になっている土地も先日、商談がまとまりましてえ」

鈴木は右手で方向を示し目尻を下げ、いかにも楽しそうに話した。そのニヤけた顔に苛<sup>いら</sup>ついて、私は「そうですか。で、今日はどうかしたのですか？」と語気を強めた。

鈴木は一瞬、眉間に皺を寄せたが、すぐに頬を緩め、渡りに舟とばかりに「いえね。更地にするときに根をすべて抜いたはずなんです、コールタールを突き破って樹木が生えてくるんですよ。それも1回だけじゃなくて、もう3回もですよ」と説明した。

横に立つ隣人は鈴木を恨めしそうな目で見ていた。

私は仲裁の労をとることよりも幾つか確認したいことがあった。

「ここには樹齢が50年になるうかという樹木がたくさん植ってましたよね。前の住人の老夫婦はずい分、手入れをされてましたよ。それをすべて伐って抜いて……」

鈴木と隣人はそれがどうかしたのか、という顔をしていた。

私は鈴木に確認した。

「元の古い家を潰して出た廃材はどうされましたか？」

「産業廃棄物として、処理業者に指定された処分場へ運ばせましたよ」

(一一)

鈴木は、不法投棄を疑われていると思ったのだろう、私の顔を睨みつけて、そう答えた。

「それって、間違ってますよね」

すぐにその顔を睨み返してやった。

「ちゃんと手続きはしましたよ。不法投棄なんてしてませんから」

鈴木は引きつった笑みを浮かべた。

「いいえ。私が言いたいのは手続ではなくて……樹木たちを蔑<sup>ないがし</sup>ろにしてるってことですよ。はなはだもって罪深いことを……」

「えっ？ どういうことですか？」

鈴木はキョトンとした顔をした。

「だから、不動産屋も住宅メーカーもダメなんだよな。いいですか。樹木たちの末裔<sup>まご</sup>はたとえ小さな柱1本であっても、樹木たちの故郷である森へ返してあげるべきですよ」

「はあ」

鈴木は目尻に力を込めた。

「廃棄物として、どう処理されたのですか？」

「燃やしたのでしょうか」

「燃やした？ 樹木たちの生命を……燃やすくらいであれば再生して利用すべきです。それが樹木たちに対する感謝というものですよ。あなた方は造っては壊し、壊しては造りの繰り返しですが、樹木たちの生命をどう終わらせてあげるべきか、を考えたことがありますか？」

私は詰問していた。

鈴木はギョとした顔で「いいえ」と答えるのが精一杯だった。

この瞬間、私はこの愚者に知恵を授けなくては、という感情がブクブクと湧いてきた。

「いいですか。この家の廃材だって、元を辿れば、外国から入ってき

たものかもしれないよ。今、世界の森林で何が起きているかご存知ですよ？」

相手が知らないことを前提にそう訊いてみた。鈴木は目を見張るばかりで答えに窮している。

「世界の木材貿易の15〜30%は違法に伐採されたものだとされています。日本が輸入する木材製品の約12% (丸太換算) は違法伐採されたものだという試算もあります。(隣人宅へ顔を向けて) この新築の家屋の建材だって、違法伐採が盛んなアジア・太平洋地域にある熱帯雨林国や、ルーマニアから入ってきたものかもしれませんよ」

私は顔を2人に戻して、「こうした違法伐採が森林の環境を破壊し、地球の温暖化を早めているのですよ。樹木たちを伐るから、抜くからCO<sub>2</sub>が増えるんです。樹木たちはCO<sub>2</sub>を吸って、洗浄して、酸素を出して、われわれ人間はそれを吸わせてもらって生きているのですよ。こんなことは幼稚園児でも知っています。樹木たちに生かされているのです。樹木たちの犠牲の下に、日本の家屋は造られています……不動産屋も住宅メーカーもどちらも樹木たちを飯の種にしていると言えますよね。もっと樹木たちのこと、その廃材のこと、森林環境、地球の温暖化の弊害などを勉強してください。……これは私からのお願いですが、儲けた金をすべて懐へ仕舞うんじゃなくてえ、もっともつと樹木たちのために使ってください。手入れをしてあげてくださいよ。それが樹木たちへの恩返しになります」と、教え諭してみました。

鈴木も隣人も私の戯言とばかりにただただ聞き入っていた。

私は、その能面のように強張った冷たい表情が許せなくなってきた。「地球の温暖化はバツタを大発生させ、人類に食料危機をもたらしています」

と、唐突とも思える話を強い口調で続けた。

「……？」

「……？」

「あなたの、その頭は空っぽですか？ ……よろしい。教えてあげましょう」

私は鈴木のみを凝視して、このときとばかりに知識を披露した。

「森林破壊は地球の温暖化を加速させています。それはサイクロンの発生回数が増えていることから自明です。サイクロンは乾燥した砂漠に多量の雨を降らせませす。すると草などが生え、バツタの繁殖条件が整うのですよ」

ここで鈴木が目を泳がせ少し首をかしげたのを確認してから、さらに続けた。

「バツタは約3カ月で一代、条件が良いと20倍に増えます。事実、2018年にアラビア半島に2つのサイクロンが襲来した際、バツタは9カ月で8000倍にも増えたのですよ。運悪く、翌年もインド洋で多くのサイクロンが発生したため、中東、パキスタンやインドでも穀物が食べ尽くされて食料危機に直面しました。最近では、アフリカ東部にあるケニア、エチオピア、ソマリアなどで大発生しました。なんと、数千億匹です。サイクロンは2020年4月にも太平洋の島国を襲いました。このサイクロンが発生するメカニズムも解明されています」

ここで一息おいてから「エルニーニョ現象、って知ってます？」と鈴木に問いかけてみたが、口をあんぐり開けたままであった。「インド洋でこの現象が生じているのです。インド洋ダイポールモード現象と呼ばれています。インド洋の東西で大きな海水温差が生じ、水害と干害を被る国があるのですよ」と付け加えた。

(どうだ！と) その顔を覗きこむように見ると、鈴木は明らかに小バ

かにした表情で口を開いた。

「あんな小さなバッタが人類に食料危機をもたらすほど草、いや穀物を食べるんですか」

蟻ンコほどの脳ミソさえあれば羨しないこの愚問に私は憐憫の情をたたえた目で静かに答えを返した。

「あなた、(右手の親指と人差し指で幅を示し) こんな小さな1匹のバッタしか考えてないでしょ。いいですか。1匹のバッタの体重はおよそ2グラムほどですが、1日にこの体重と同じ量の草を食べます。バッタは単独では行動しません。密度の高い環境で育つと、集団行動をとる成虫が現れ、それが世代変化を繰り返すと、全体が『群生相』と言って、見た目も違った凶暴なバッタの群れに変化するのです。『サバクトビバッタ』です。幸い、日本にはいませんが、このバッタは1日に150キロを移動します。そして群れは1日に3万5000人分の食料を食べ尽くします。温暖化の進んでいるこの日本にも近々、飛来するかもしれません。……ご存知ないですか？ 日本でもかつてトノサマバッタが大発生し、飢饉を体験させられました。『蝗害』という専門の言葉もありますよ」

警告というよりも脅すような最後の言葉を強調した。

知識の無さを痛感したのか、鈴木と隣人は視線を虚空にさまよわせて。しばらく沈黙の重い空気が淀んだ。

その空気を掃おうと、私はさげすむような目をして鈴木のでっぷりと突き出した腹を見ながら、また話した。

「鈴木さん。あなた涼しい顔して聞いてますが、あなたその体型、明らかに肥満ですよね」

鈴木はさっと視線を腹に落とした。

私は口元を緩めて続けた。

(一四)

「糖尿病の予備軍ですよ。いいですか。温暖化で平均気温が1度上がると生活習慣にかかわる(2型)糖尿病患者が1000人当たり0・314人増えるという研究成果があるんですよ」

「研究、ですか？」

鈴木は分からんという声音を洩らした。

「はい。アメリカの研究者たちが成果を出しています。彼らは体内にある『褐色脂肪組織』に注目しました。この組織は寒いと脂肪を熱に変え、体温を維持する働きをします。が、温暖化で気温が上がると組織の働きが弱まってカロリー過多で糖尿病を発症させるのですよ。事実、世界ではこの糖尿病患者数が増えつつあります」

鈴木は自覚しているのか、目を泳がせた。隣人は関心外のことだとそっぽを向いていた。また、虚しい時間が過ぎた。

そろそろ本題に入ろうと、私は隣人宅の森に目をやり「伐り倒したことが……」と、ポツリと溢した。

それをかろうじて聞き取った鈴木が訊いてきた。

「伐り倒したことに何か問題でもありますか？」

私はそのカラスが持つ知能の欠片もなさそうな愚顔をあえて睨みつけ、「大ありです」と強く返した。

その声に怯みながらも鈴木はどんな問題があるのか、とまた訊いてきた。

私は(しよがないヤツだ。説明してやろう)身構えて鈴木と隣人を見た。

「いいですか。樹木たちをむやみに伐り倒すもんじゃありません」

2人は怪訝な目で私を見返してきた。

その目に向かって私はゆっくり噛んで含めるよう話した。

「ここにあった樹木たちはここに植えられて40数年、生長してきまし

た。元の植木屋では5〜10年苗として育てられたことでしょう。そうすると樹木たちは半世紀もつないできた生命をあなた方の浅はかな知恵でもって断たれたことになりました。……分かりますか?」ここで一息おいて、続けた。「伐り倒すのは簡単です。一分足らずで倒せます。半世紀の間、懸命に生きてきた生命をわずか一分、小便を垂れるに足りる時間で断ってしまったのですよ」

不満げな顔をして鈴木は口ごもりごによごによと何か呟いた。

「反論、ありますか?」

私は威圧する声を発した。

すると、鈴木は少し口を尖らせながら「新たにお住まいになる方はすべてをゼロにして、つまり更地にした上に自分たちの家や人生を築きたいと思うのは当然でしょ」

私は、この最後の「当然でしょ」という言い草に腹立ちを覚えた。

「あなた。人間の当然だけで、他の生命を奪ってもいいと言うのですか?」

私の強い口調に鈴木は顎をグググッと引いてのけぞった。

それにかまうことなく私は続けた。

「それは人間の傲慢、驕りというものですよ。人間も樹木たちも自然の中で生きてますよね。同じ生命を持っているんじゃないですか? 生命に優劣などありません」

ちらちらと横目で私と鈴木を見ながら黙って聞いていた隣人は(聞き飽きた、聞き疲れた)こんなヨタ話はどうでもいいという顔をしてぼつりと言った。

「根が完全に抜けないから」

掘り起こした根の一部が地中に残り、それがしぶとく生長してくると思っっているようだ。確かに、そうだ。根があるから芽が出て幹が出

て、枝が伸びる。(その生命力に敬意を払うべきだ、と出そうになる)言葉を喉の奥に飲み込んで、私も同意した。

「そうでしょうね」

このあつさりとした相槌が意外だったのか、2人はポカンと間抜け面をした。

「今度は小さな根までしっかりと抜き取ってください」

隣人は私の言葉の真意を探ろうともせず、鈴木にそう声をかけた。

鈴木も私の言葉を推し量ることなく、「うん」と頷いてから、この土地には何か良くない祟りでもあると思ったのか、「地鎮祭もして、しっかりとお祓いをしてもらったのですが……」と、神妙な声で言った。

「どこの神社ですか?」

とつさに言葉が出た。

「はあ、当社がいつも頼んでいる札幌市の神社です」

「えーっ?? ここは札幌市じゃないですよ」

「それが何か?」

鈴木は反射的に訊いてきた。

「あなた、この仕事を何十年やってるんですか!? もう、まったく、分かっていない。その土地その土地に氏神様がいて、その地域にいるあらゆる生命体の幸福、安全、安心を祈っているのですよ」

「はあ〜」

鈴木は素っ頓狂な声を洩らした。

「はあくじやないでしょ。神様だって嫉妬しますよ」

鈴木は何をバカなという目を返してきた。

その目に私は口撃を加えた。

「そんな浅薄な信心だから、樹木たちの怒りがかつたのです。あなた! 商売をする前に、大いに反省して、もっと勉強しなさい!」

「はあ〜」

一転して鈴木は、はっきりと薄ら笑いを浮かべた。

「これは幻なんかじゃなくて、現実ですよ。うちの庭をご覧下さい。これらの樹木たちの多くは私の前の住人が植えて育てたものです。それをそっくり受け継ぎましたよ。枝は落としてあげても幹を切ったこともなければ、ましてや抜いたことなどないです。季節ごとに色んな野鳥が羽を休めています。……私とともに生きているのですよ。どの生命もつながっているのです。……分かります?」

2人は何も答えなかった。ただ、あんどりと口を開けているばかりであった。

「鈴木さん、あなたの苗字には木という字がついてますよね。木を取ったら風に揺れる鈴にしかすぎない(笑)。その上、(停車中のSUV車を見ながら)あなた車を使っているなら、温暖化に加担してまずよ。CO<sub>2</sub>を出しています。その分、他の誰よりももっともっと樹木たちを大切にしないさい」

私は嘲笑の意図を込めて、ニッと口元を歪めてみた。

2人のあんどりと開いた口がさらに広がった。

「伐つても抜いても生長してくるのは樹木たちの生きたいという執念の現われです」

ここで一呼吸おいて、

「この地球の上で生きているのは人間だけじゃありません。鳥も花も虫も水も石ころも風も空も樹木たちも全部生きています。世の中全部が生きている。愚かな人間はそういうすべてのものの声を聴く耳を持つていない」

その間抜け面を凝視しさらに強く論すよう、

「分かります? さあ、樹木たちの声を聴きましょう。樹木たちを植

えましょう。ふっふっふっ」

私は頬を緩めて笑みを溢した。

数日後。女房を連れて町内をウォーキングしていると、聞き覚えのある器械音が鼓膜を刺激してきた。

「ギーン、ギーン、ヴィーヴィー、ギーン、ヴィーヴィー」  
チェーンソーの音である。

私の心臓は早鐘を打ち始めた。その音源を求めて早足になった。角を曲がると、そこには大型のダンプカーと重機が停まっていた。

懸命につけてきた女房は息を整えてから、「あら。ここでも伐っている」ポツリと言った。

「うん。ここも確か樹木たちがたくさんいた家だ。1週間前は更地だったの?」

私は記憶の映像を脳に再生していた。

「この町内も高齢化で世代交代が進んでいるから。古い家を壊して、更地にして売らんでしょうね。『売地』っていう看板をよく見かけますよ」

そう話す女房へは答えず、私は額に左手を当て歩く速度を緩めた。

「お父さん。先に帰りますから」

女房は特別な興味も示さず、スタスタと速度を上げ、私から離れて行った。

私は女房の背中を見ながら思案しつつゆっくりと進んだ。次の角を右に曲がって女房の背中は見えなくなった。

その角をもう1つ右に曲がれば、拙宅の前の道路に出るという手前で私の足は止まった。前方には鬱蒼とした森があった。そこも更地にされた後、新築の家屋が建っているのを4日前に見た。森は誰の侵入

をも許さない空気を発散させていた。樹木たちは密林を思わせるほど込み入っており、枝と枝とは厚く交差し、まるで伸びることを競い合っているふうに見えた。それは生命に満ち溢れていることを主張していた。目を凝らすと、かすかに家屋が見えた。それは樹木たちに飲み込まれているふうだった。

そのとき枝が大きく揺れた。一瞬ではあるが、でつぶりと太った生き物が目に飛び込んできた。生き物は顔をこちらへ向けて口元をキッと歪めた。「あつ！ す・ず・き……？」と、私の声が洩れた。すぐに生き物は青々と茂る葉っぱに吸い込まれるよう消えた。

いつしか私は濃密な静寂に耳を澄ませ、樹木たちの声を聴こうとしていた。

樹木たちがバッタのように群れを成すと、こんなにも傲慢に、凶暴化し、強靱すぎるほど青々と育つ理由は……きつと樹木たちは人間たちの驕りや腐敗を食って肥え太り、枝を落とされるたびに、幹を伐られるたびに、根を掘り起こされるたびに、芽を吹かせるのだろうか。

はるか昔に何かあったのか？ 樹木たちは邪悪に猛々しく茂り、毒気と復讐に燃えるウイルスのごとく人間に對抗している……。だが、樹木ごときがそんな力を持つとは、あまりにも奇怪千万だ。決してありえないことだ。そう否定してみるものの、私はそんな樹木たちの生命力に賞賛と不安とがないまぜになった気分で見上げていた。

その光景をはるか遠くから、じーっと眺めている目が眩いた。

「この地上にいる生き物や樹木たちは、誰かのために存在しているわけではない」

(了)

付記。拙稿はアンナ・カヴァン(2013)に触発されて創作してみた。

「太古より、はるか遠くから、こちらをじーっと眺める目」の正体はエイリアンである。この一文によって、内容をSFっぽくしてみた。緑を愛するエイリアンは棲む星を求めて、この国の北の大地をじーっと眺めている。脱炭素(CO<sub>2</sub>)は実現したものの人口の減少には対処しきれず、北の大地は原始の森に回帰する。その森に棲みついたエイリアンはハンモックに寝そべり海峡の向こうに延びる列島に、まだ残る森と都市をじーっと眺めている。エイリアンは列島すべてを支配したいのか。生き物や樹木に起こる怪現象はエイリアンの仕業か。これは明示していない。想像を楽しむために。モチーフは、自然を冒瀆する罪の重さ儼さを知ろうとしない人間の傲慢さを描き、物言わぬ物たちへの畏怖を想像することである。この想像力がすべてである。カヴァンの作品は自身への脅迫観念に囚われた心境小説っぽい。拙稿は有情体験という奇想(幻想)を描いたものである。有情体験とは、人間以外の事物、犬や猫、鳥、石、樹木、空、風、水などが自分に向けて語りかけてくる感覚のことで精神分析の言葉である。拙稿の5つの(掌編・短編)連作品は奇想小説が問う理不尽(不条理)をモチーフとしている。動物が話し、突然、目の前に現れた樹木が無言で語りかけてくるのである。この理不尽な筆者は人間の都合で伐られる樹木たちの魂の叫び、人間への逆襲と捉えたい。森林破壊や地球の温暖化に加担し続ける人類への樹木たちからの警鐘として読んで欲しい。

なお、宮沢賢治の作品にも有情体験を取り入れたものが多い(井上ひさし、2019年参照)。有情体験を万物に魂が宿っているという感覚だと捉えると、これはション・タン(2020)にも通じるし、また「妖怪」にもつながる。事実、水木しげる(2015)「妖怪万年竹」「豆腐小僧」を読んで、その思いを強くした。

#### 参考文献

- 『朝日新聞』「今さら聞けない 違法伐採」2017年2月25日。
- 『朝日新聞』「ユリイカ 温暖化で糖尿病に？」2017年7月6日。
- 『朝日新聞』「いちからわかる！ バッタの大群の被害がアフリカに出ているの？」2020年2月15日。
- 『朝日新聞』「太平洋上の島国 進まぬ復旧」2020年4月22日。

- 『朝日新聞』「バッタ対策コロナが阻む アフリカ東部国連「2千万人が食料危機」」2020年5月11日。
- 『朝日新聞』「天声人語」2020年6月18日。
- 『朝日新聞』「バッタ猛襲「生きていけない」」2020年9月6日。
- 『朝日新聞』「つながる「バッタ家族」」2020年9月26日。
- 井上ひさし(2019)「ユートピアを求めて——宮沢賢治の歩んだ道——」『この人から受け継ぐもの』岩波現代文庫、54頁、57頁参照。
- 神里達博「月刊 安心新聞プラス バッタの大発生被害 根本は過度な自然破壊」『朝日新聞』2020年3月20日。
- 水木しげる(2015)「妖怪万年竹」「豆腐小僧」『ゲゲゲの鬼太郎⑤』中公文庫、5〜38頁、277〜300頁所収。
- アンナ・カヴァン(西崎憲編訳)(2013)「輝く草地」『短篇小説日和 英国異色傑作選』ちくま文庫、411〜424頁所収。
- K・S・シュライバー(2021)「気温が1度上がると、どうなるの?——気候変動のしくみ——」西村書店。
- シヨン・タン(岸本佐知子訳)(2020)『内なる街から来た話』河出書房新社。
- ペーター・ヴォールレーベン(長谷川圭訳)(2019)『樹木たちの知られざる生活 森林管理官が聴いた森の声』早川書房。

